

社会学のディシプリン再生と デュルケーム



目次

●本科研の概要	1
●2016 年度研究報告・2017 年度研究計画	2
●第 4 回全体研究会の報告	10
●活動報告	16
●連載 玩味玩読デュルケームのことば 第 5 回	18
●2016 年度成果報告	21
●お知らせ・今後の活動	23
●クロニクル	24

News Letter
vol.5
2017.7

5

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究（B）「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

●研究課題名 社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として

●研究代表者 中島道男（奈良女子大学）

●研究分担者 14 名 ●連携研究者 3 名 ●研究協力者 13 名（平成 29 年 7 月現在）

●研究種目と期間 基盤研究（B）（15H03409）

平成 27（2015）年度～平成 30（2018）年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築してきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、（A）多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、（B）学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、（C）学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、（D）我が国における社会学教育（特に学説・理論教育）を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

2016年度研究報告・2017年度研究計画

A 起源解明チーム

●研究分担者（班長以外は50音順。以下同）

太田健児（班長） 尚絅学院大学総合人間科学部 教授
小関彩子 和歌山大学教育学部 准教授
菊谷和宏 一橋大学大学院社会学研究科 教授
北垣徹 西南学院大学文学部 教授

●連携研究者

池田祥英 北海道教育大学函館校 特任准教授

●研究協力者

赤羽悠 フランス国立社会科学高等研究院 博士課程
荻野昌弘 関西学院大学社会学部 教授
笠木丈 フランス国立社会科学高等研究院 博士課程

◆2016年度研究報告

デュルケーム社会学の起源解明とはそもそも何を意味し、その達成のためどのような研究方法が有効なのか。これを自問自答しながら2016年度の研究活動は続けられた。つまり『社会学的方法の規準』(以下『規準』)をディシプリン化の一つの到達点とみなし、『規準』自体の研究及び新訳作業を軸に、その成立過程と成立以後、それらの周辺を、デュルケームのテキストの内在的理を根本に据えながら、当時の思想潮流一般となるべく丁寧に再現させ、その中にデュルケームを位置づけて、デュルケーム社会学を浮き彫りにしていく作業を下記の通り継続した。

一つは春の全体研究会で「社会学的方法の規準成立の“周辺”」というタイトルの下、「社会思想から“社会学”へ—実証主義の系譜の再編の試み—」(太田)・「ジャン=マリー・ギュイヨーの道徳論」(北垣)・「デュルケム認識論における二つの位相」(小関)と題して発表報告を行った。『規準』の新訳作業(菊谷)が着々と進む中、他の3人はその周辺つまり外堀を埋める作業に徹したことになる。2015年度のA班の研究成果の一部である「実証」「社会学」「社会学者」というキーワードがデュルケームだけに限らず、広く人文系学問と共有していた点を深めるべく、フランス思想史の奥の深さ、裾野の広さ、ある種の自己完結的な思想空間(ドイツ哲学に依拠せずともフランスだけで一つの思想空間・系譜を築いていたという事実)を証明する作業が行われたわけである。そして、フランス版ニーチェのようなギュイヨー、世評に比してデュルケームとの思想的共通性が多々あるベルクソン、言語学的観点からのデュルケーム思想の再構成の可能性などが明らかになった。中でもデュルケームとベルクソンとの比較思想研究は国際学会でも発表された(小関)。

さらにこれらが継続され、12月には一橋大学でのA班研究会に持ち込まれた。「社会学的方法の規準成立の“周辺”」あるいは「デュルケーム独自のディシプリン」解説には、他の社会科学とデュルケーム社会学との相関解明が必須である。この観点から、A.スミスやマルクスがデュルケームにどう流れ込んでいるのかを『社会分業論』の再読を通しての研究(荻野)、フランス経済学史からみたデュルケームの社会分業論研究(吉本)、外堀埋め作業としてのドゥプロワジエやリシャールの研究(池田)の発表とかなり深入りした討論が行われた。今日的な高度化・専門化され個別細分化されていたわけではない当時の社会科学にあって、デュルケ

ームにおける経済学的志向の有無、サン・シモン研究とは一体デュルケームにとって何だったのか、彼の思想圏外に成り下がったのか、その後のデュルケミアンたちの社会運動や労働運動、延いては政治活動へのコミットメントをどう評価し、その点へのデュルケーム自身の社会学の理論的影響の有無など、今後も A 班の重要な研究課題である点が確認された。

なお、起源解明、社会学的方法の規準成立という看板からは、この時代「以前」か「同時期」の研究を連想してしまいがちだが、そうではない。デュルケーム以後を知らずして、デュルケームの思想を浮き彫りにはできない。デュルケームが弟子たち、他の社会学者や思想家たちにどのような影響を与えたのか、この点から「逆照射」することで起源解明がよりよく進展するからである。

◆2017 年度研究計画

A 班の 2017 年度の研究計画は 2016 年度とほぼ同様だが、次の五つの作業からなる。①『社会学的方法の規準』(以下『規準』と略記)の新訳披露(菊谷)、②『規準』成立の周辺解明のための『社会学年報』分析の継続(北垣、太田)、③デュルケーム社会学と他分野(哲学・倫理学)(小関、池田、北垣、太田)、④社会科学史の中のデュルケーム 一特に A.スミス、マルクス、デュルケーム以降の社会運動との関連を中心に一(荻野、吉本、太田)、⑤デュルケーム研究の最前線の把握(北垣、小関、荻野、太田)、以上五つからなる。

①に関しては、新訳完成の報告があったので、それを原本に全員でテキストクリティークを行う。②については、『社会学年報』の解読を加速し、デュルケーム社会学と「それ以外」との違いの「決別点」がどこにあったのかを探し続けていく。ただし、この際「ディシプリン」の発見をデュルケームのテキスト解読=内在的理義を土台に置く点は変更しない。③については、『規準』成立あるいは成立後の周辺を、当時の歴史的文脈に還元し、その詳細をズームアップする作業の継続になる。特に、デュルケーム思想におけるベルクソン哲学との違いよりも類似性探索の意義が優る点をこの 2 年間で確認できたので、ベルクソン自体の研究成果(国際学会で発表済)も取り入れてさらに検討を重ねていく。また、J.M.ギュイヨーなど社会学とは一線を画する道徳論の系譜との対比作業は 2016 年度から本格化したので、その他の思想家群を視野に入れ、次は誰を狙っていくか現在検討中である。④については、昨年 12 月の A 班の研究会(一橋大学)で、A.スミス、マルクスと『社会分業論』との相関というオーソドックスで骨太の研究報告がなされ(荻野)、同時に経済学史の中の『社会分業論』というテーマで、経済学分野への精通者でなければなし得ない貴重な研究報告もなされ(吉本)、改めてこれらの観点の重要性が確認されたことによる。また、デュルケーム以降の社会運動との関連を視野に入れておく必要性がある。なぜなら、デュルケミアンの中から活発な社会運動家が輩出し、それに応じた社会運動論が展開されたという歴史的背景があるからである。この観点からの研究なくしてデュルケミアンの社会学の立体的再構成は不可能であることも、この研究会の議論の結果であった。⑤については、2016 年度からの継続である。ロラン・ミュキエリの研究や J-M・ベルトウロらの研究紹介を本格的にしていく。ル・プレ学派とデュルケームとの関連の有無の解明なども 2016 年度から新たな研究課題として浮上してきたので、これも継続して作業に組み込んでいく。加えて、荻野昌弘氏によるフランス社会学史研究(『社会学史研究』日本社会学史学会に掲載)という金字塔が存在しており、A 班では、それを参照しながらフランス社会学史の再構成を 2016 年度から行っているわけだが、2017 年度はさらにそれに肉付けをして、フランス社会学史の抜本的書き換えを目指していく。

中間報告を兼ねた研究会は冬に実施する(関西学院大学か一橋大学を予定)。

B 解釈史検討チーム

●研究分担者

岡崎宏樹（班長）	神戸学院大学現代社会学部 教授
江頭大蔵	広島大学大学院社会科学研究科 教授
中島道男	奈良女子大学研究院人文科学系 教授（研究代表者）
古市太郎	文京学院大学人間学部 助教
三上剛史	追手門学院大学社会学部 教授

●研究協力者

金瑛	甲南女子大学 非常勤講師
杉谷武信	東京工学院専門学校公務員科・航空学科 専任教員
溝口大助	日本学術振興会ナイロビ・センター センター長
村田賀依子	奈良女子大学 非常勤講師
吉本惣一	横浜国立大学 成長戦略研究センター研究員

◆2016年度研究報告

2016年度は、3度の班別会議を開催し、デュルケーム社会学が社会学・人類学・思想の分野でどのように批判・継承されたかを解明する作業を中心に研究を進めた。研究は概ね順調に進められている。

2016年6月12日14:00～17:30（場所：KYOTO de MEETING）に開催された第1回班別研究会では、岡崎宏樹が「カイヨワとバタイユの戦争論——聖俗理論の展開」と題した報告をおこない、村田賀依子が「ブルデューとデュルケーム——國家の権力・存在の意味・象徴資本」と題した報告をおこなった。

2016年9月24日13:00～17:00（場所：キャンパスプラザ京都 第2会議室）に開催された第2回班別研究会では、三上剛史が「『贈与論』の問題圈と“贈与”の神話——Mauss から MAUSS へ」と題した報告をおこない、中島道男が「社会学のディシプリン再生——バウマンのデュルケム批判を出発点に」と題した報告をおこなった。

2017年1月7日13:00～17:00（場所：キャンパスプラザ京都 2階ホール）に開催された第3回の班別研究会では、金瑛が「デュルケーム学派と心理学——デュルケームとアルヴァックスを中心に」と題した報告をおこない、古市太郎が「贈与と社会性（le social）——贈与論の継承と展開」と題した報告をおこなった。

研究会では毎回学説研究が〈社会学のディシプリン再生〉という主題に対し、どのような意義を持つるのかを検討した。

本科研に関する成果研究成果（詳細は21、22ページに記載）としては

- ・三上剛史「『贈与論』の問題圈と“贈与”の神話——Mauss から MAUSS へ」
- ・岡崎宏樹「文学からの社会学——作田啓一の理論と方法」
- ・岡崎宏樹「規律訓練と主体化（M. フーコー）」
- ・岡崎宏樹「〈リアル〉の社会学——作田啓一の生成の思想」

また、学会報告としては

- ・岡崎宏樹「現代社会の変容と超近代へのまなざし——作田啓一の犯罪論と憐憫論」
- ・杉谷武信「デュルケムの『道徳の科学』についての試論——『内在的事実』と『外在的事実』の関係を中心に」
- ・村田賀依子「ハビトゥスと潜在性 (potentialité) ——実践と状況の関係をめぐる考察」

なお、2016年8月20日、研究分担者（解釈史検討班）の飯田剛史教授（大谷大学文学部）が病気のため逝去された（享年66）。デュルケームの理論研究のみならず在日コリアンの宗教とまつりの研究で大きな功績を残された飯田先生の早すぎるご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈りしたい。

◆2017年度研究計画

2017年度も、引き続き、デュルケーム学派の社会学が、どのように解釈され、批判・継承されたのかという問題を検討するとともに、その学知がどのような現代的意義を持つのかという問題について重点的な検討を進めることにしたい。二点目の問題については、デュルケーム学派の学知が、①現代社会学、現代思想においてどのように批判・継承・忘却されたのか、②現代社会のリアリティを分析する際にどの程度有効なのかという点に注目して考察を進め、さらに、③学説研究の成果が「社会学のディシプリン再生」にどのように寄与しうるのかを深く検討する予定である。

班別の研究会は、第1回を4月に、第2回を6月に、第3回を9月に、さらに日程を調整し、年度内に後1~2回の研究会を開催する予定である。研究会の開催場所は京都および奈良を予定している。

第2回研究会（6月：奈良女子大学）では、笠木丈（A班所属）が「ベルクソンとデュルケームの比較考察」をテーマに報告し、江頭大蔵が「個人と社会の相互浸透性と異質性」をテーマに報告し、また、第3回研究会（9月：奈良女子大学）では、参加メンバー全員が、それぞれの学説研究の成果が「社会学のディシプリン再生」にどのように寄与しうるのかというテーマについて報告をおこない、全体で討論する予定である。研究会では、各メンバーが研究の進捗状況について報告し、研究情報に関する情報交換もおこなう。

年2回の全体研究会においては、他の班の成果を吸収するとともに、解釈史研究という角度から何が寄与できるかを検討する。

班別研究会・全体研究会以外の機会では、メールやネット会議によって隨時情報交換や討議をおこなう計画である。

なお、9月18日13:30~18:00（東京・日仏会館）には「社会の境界と社会学の境界——社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」と題した国際シンポジウムが開催されるが、B班の代表である岡崎宏樹が報告をおこなう。また、9月21日は、（京都・キャンパスプラザ京都）で「古典から現代へ——社会学のディシプリン再生はいかにして可能か」と題した国際シンポジウムが開催され、B班の研究メンバーである江頭大蔵が報告をおこなう。これらの報告は、B班の研究成果が活かされたものとなる予定である。

C 國際比較チーム

●研究分担者

藤吉圭二（班長）	追手門学院大学社会学部 教授
中倉智徳	立命館大学先端総合学術研究科 非常勤講師
林大造	追手門学院大学社会学部 准教授

●研究協力者

速水(小島)奈名子	神戸大学大学院人文学研究科 研究員
横井敏秀	大阪大学外国語学部 非常勤講師

◆2016年度研究報告

国際比較班では、海外現地調査と文献調査を中心に、デュルケームおよびデュルケーム学派の理論が、世界各国においてどのように受容され、また学部教育のプログラムにどのように組み込まれているかについて、調査を実施してきた。国際比較とはいえ限られた予算で世界全体を対象にすることは困難なため、効果的に成果を上げることを目的に、特に非西欧圏に力点を置き、2016年度は韓国・建国大学統一人文学センター研究教授のキム・ミヨンヒ（金明姫・Kim Myung-Hee）教授を訪問し、インタビューを実施した（林大造、中倉智徳、安孝淑）。

キム教授は、博士論文でマルクスとデュルケームを社会学史・理論史として論じられて以来、デュルケーム理解の更新とその現代的応用に努められ、とくに社会学的トラウマ理論から、自殺や被害者に関する研究をされている。強く印象に残ったのは、キム教授が、深いデュルケーム愛と理解とに基づいた実践的な応用を一貫してなされていることである。デュルケームの前期／後期という区別をあえてせず、「一つのデュルケーム」として理解し、社会科学を自然科学へと還元する還元主義に対抗するために、デュルケームの科学認識論を、創発特性によって還元しえない階層性をもった批判的実在論の基礎理論として解釈しておられた。この立場は理論的なものだけではない。彼女は「九老（クロ）市民センター」の創設などの市民運動への参加や、さらには韓国政府の自殺対策の委員会やセウォル号沈没事故の研究プロジェクトの審査など、実践的な活動にも関わっている。とくに自殺対策について、心理現象（うつや報道による模倣）や経済現象（不況）といった還元主義的な理解と対策が中心であったのに対し、自殺をそれらに還元しえない社会学的な現象としてとらえ、むしろ家族を含む社会的な紐帯をどのように再活性化するかが課題であるという立場から、自殺対策の変更を政府の委員会において提言されている。このような新たなデュルケーム理解に基づいた政策提言を行なうキム教授の姿勢は、社会学のディシプリン再生を目指す私たちの科研の重要な参考となるのではないか。

最後に韓国の状況について言及しておくと、やはり理論社会学は危機的状態にあり、とくにデュルケームおよびフランス社会学の受容は不十分であるとのことであった。デュルケームの著作の訳出も最近になってからで、1990年に『自殺論』が訳出されたのが最初であり、2012年に『社会分業論』が刊行されたことで、ようやく主著がそろうような状況であった。ただ、ベラーの弟子でソウル大学のパク・ヨンシン氏の元でデュルケーム研究を行なった院生が多く輩出されたほか、『社会分業論』の訳者ミン・

ムンホン氏らの活動によって、デュルケームの再評価の機運が高まりつつあるそうだ。今後は日韓でデュルケーム研究を連携して進めていくといった新たな展開もみえてくるような調査となつた。

◆2017年度研究計画

国際比較班では、2016年度までの2年間にスペイン・バルセロナ(2016年2月)、韓国・ソウル(2016年9月)において現地調査を実施し、また台湾での社会学古典教育に関する聴取り調査(2016年1月)を、来日中の台湾人社会学者に対して実施した。これらはいずれも個別に実施され、それぞれの国内での状況を調査したものであるが、その結果を互いに突き合わせることによって、各国に共通の課題も見出すことができたと思われる。それを並べると以下のようになる。

(1) 100年ちかく前のフランスで論じられた社会に関する議論が今の社会を検討するのにどのような意義を持つか。

(2) 社会学を学ぼうとする今の学生に社会学の古典はどのような意義を持つか。

いずれも特段目新しい課題ではないが、それぞれに異なる背景を持つ各国の社会において、ひとつの理論枠組みがどのようななかで意義ある視点を提供しうるのかについて、なお掘り下げるべきものと言える。韓国、台湾、日本は同じアジア圏の社会であることから、デュルケーム的視点がその分析にどのようななかで有効性を発揮するかを比較検討することは、その理論的射程を測定するうえで重要な作業である。

また調査地のひとつであるスペインは広くみてヨーロッパ社会に属するが、その調査の過程で知己を得たコロンビアの社会学者とは、「外来の社会学理論で自分たちの社会を考察すること」に関する共通の問題意識を確認することができた。

2017年度は予算等の制約により新たな海外調査を組むことは困難だが、過去2年間の調査結果を検討する研究会を実施し、また調査の過程で協力関係を得ることのできた海外の研究者とはメール等を通じて情報交換することにより、学術論文等のかたちで成果を発表していく予定である。

D 社会学教育チーム

●研究分担者

白鳥義彦（班長） 神戸大学大学院人文学研究科 教授
小川伸彦 奈良女子大学研究院人文科学系 教授
横山寿世理 聖学院大学人文学部 准教授

●連携研究者

梅村麦生 日本学術振興会 特別研究員 - PD（京都大学）
山田陽子 広島国際学院大学情報文化学部 准教授

●研究協力者

安達智史 近畿大学総合社会学部 講師
梅澤精 新潟産業大学経済学部 教授
川本彩花 関西大学 非常勤講師

◆2016年度研究報告

2016年度にD班は3回の班別研究会を開催し、各人が報告を行って議論を深めることによってそれぞれの研究を進めてきている。班としての全体的な方向性は、社会学教育という観点から、デュルケム／デュルケーム学派にアプローチすることである。具体的な研究の対象としては、シラバス、教科書等を中心としてきている。シラバスの検討を通じてどのような教科書が多く使われているかを明らかにし、その教科書についての具体的な考察を行う、といった手順も用いている。取り上げる教科書は日本のものが多いが、フランス語、英語、ドイツ語のいくつかも対象としてきている。教科書で取り上げられるのはデュルケームの生前の四著書およびそこで論じられている諸概念が多く、他方、経歴としても著作としてもデュルケームにおいて重要な位置を占める教育に関しては今回研究対象とした教科書ではそれほど取り上げられてはいないということなど、実際に教科書を読んでみてわかったことも少なからずある。また、デュルケームの社会学がどのようにして「古典」となっていったかを考察する「『古典』化の社会学」というアプローチからの研究も引き続き行っている。研究成果の公表として、論文「テクストから見るデュルケーム受容」、「ディシプリン／教科書関係論のために—社会学入門テキスト分析における対象書目抽出方法論」の刊行や、ウィーン大学で開催された第3回社会学 ISA (International Sociological Association) フォーラムでの発表、国内の学会での報告なども行なっている。D班は、班として『命題集』の刊行に関わるということも意識しており、企画編集に携わる先生方とも協力しながら、情報を共有しつつ実現を目指して活動している。

◆2017年度研究計画

2017年度もD班=社会学教育チームは、理論・学説史というディシプリンのコアの部分を適切に継承すべく、社会学の教授法を調査するとともに、新たな教育方法を開発し、ディシプリン再生に実践的に取り組むという、本科研における班としての課題に取り組んでいく。科研3年目となる本年度は、これまでの班別研究会を通じて得られた蓄積を生かしながら、国内の社会学テキスト（教科書）やシラバスの検討を通じて日本の大学教育におけるデュルケームを中心とした社会学史・社会学理論の位置づけを明らかにすることをさらに進めていく。また国外の状況についても、英語圏、フランス語圏に加えてドイツ語圏も主たる対象としながら、テキスト（教科書）、シラバス、またインターネット上に公開されている講義の内容等を通じて、国内の状況との比較の視点を持ちながら研究を進めていきたい。デュルケーム社会学がどのように「古典化」されていったのかについて、国内外の研究書や教科書を通じて明らかにしていくことも目指す。

学説研究の成果を活かした新たな社会学教育法と教材のモデルを開発するという大きな目標の下でのより具体的な成果として、2015年度から編集についての議論を継続的に行ってきている『デュルケーム命題集』（仮題）の、出版社との交渉を含めた刊行の準備も、編集委員会と協力しながら引き続き進めていく。

これらの研究を着実に進めていくために、前年度までと同様に、年3~4回程度の班別研究会を開催し、メンバー間での研究成果の共有を図る。また研究成果の公表の一つとして、4月の本科研第4回全体研究会におけるミニシンポジウムをD班が担当して報告を行うとともに、9月に東京および京都で開催予定の本科研による国際シンポジウムに積極的に関わり、さらに11月の日本社会学会第90回大会においても、複数の報告を行う予定である。

こうした研究活動を通じて、デュルケーム社会学を事例として社会学のディシプリン再生はいかにして可能かということを探究していく本科研での4年間の研究のための基盤を一層確かなものとし、具体的な研究成果につなげていくことが、2017年度の目標である。

本科研の第4回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第34回研究会と共に）を下記のとおり実施しました。第2部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

- 日時：2017年4月15日（土）13:30～17:45
- 場所：文京学院大学 本郷キャンパス B館410教室（東京都文京区）
- 参加者：25名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
- プログラム：

第1部 自由報告

「デュルケムの社会学的思考と政治哲学——『世論（opinion）』の概念を手がかりに」

赤羽 悠（フランス国立社会科学高等研究院）

コメンテーター：池田祥英（北海道教育大学函館校）

司会：中島道男（奈良女子大学）

第2部 科研関連報告ミニシンポジウム

テーマ「社会学教育におけるデュルケーム/デュルケーム学派——日仏英米独の事例から」

- ・「索引の中のデュルケーム

——装置としての教科書から＜古典化＞プロセスを解読する手法について」

小川伸彦（奈良女子大学）

- ・「デュルケーム社会学の語られ方——日本の社会学教科書分析を通して」

横山寿世理（聖学院大学）

- ・「日本の社会学教科書における理論・学説の教授法」

川本彩花（関西大学）

- ・「ドイツの大学教育における社会学史・社会学理論とデュルケーム——シラバスと教科書から」

梅村麦生（日本学術振興会／京都大学）

- ・「日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケーム」

白鳥義彦（神戸大学）

全体討議 司会：江頭大蔵（広島大学）

索引の中のデュルケーム

——装置としての教科書から＜古典化＞プロセスを解読する手法について——

小川伸彦（奈良女子大学）

研究の営為がディシプリンとして成立し維持されるには、なんらかの「古典」をストックとして集合的に所有することが必要な分野が存在する。多くの人文・社会科学系の分野とともに、社会学もそのひとつに数えられるのではないか。では、社会学の“founding fathers”のひとりとされるデュルケームの著作は、いかにして「古典」となり、社会学のディシプリンを支える柱の一つとなったのか。それに迫る方法論を探究したい。

探求において使用する主要な概念はふたつ。古典（＝長く読み継がれるべきであるという価値が一定の範囲の主体にひろく共有され、さらにその認識が事実上一定期間受け継がれた実績を有する著作）と、古典化（＝特定の著作（群）が古典となるプロセス）である。

この「古典化」には2つの位相があるといえよう。明示的認知（＝「古典」“classics” “classical”というような語を用いて、実際に特定の著作を形容）と事実上の認知（その著作に直接間接に頻繁に言及することによる、事実上の認定）である。

では「古典化」を測定する指標にはどのようなものがあるか。つぎの通り列挙できよう：辞書や事典への掲載やその扱いの大きさ／特定の学問分野における教科書での言及の頻度や重視度／実際に「古典」と呼称されているかどうか／学術論文で言及・引用される頻度／教育機関での言及頻度や講読対象としての重視の度合い／著作集や全集の刊行／その著者に特化した研究集団の存在／その著者の著作群の解読のための事典等の存在／著者をめぐる記念碑・記念日・記念祭・記念建造物など／学会誌での記念年特集号（例：没後50年記念特集）やシンポジウム／非専門家における認知度 etc.。

このうち教科書は以下の4つの機能を有する媒体であるといえる。すなわち、①体系性の維持・表出装置／②継続性の維持装置＆漸次的変容の実現装置／③社会的発信装置／④研究者の再生産装置、である。

そしてそこに掲載されている「索引」、特に“name index”に注目し、人名のカウントの変化から古典化のプロセスを読み取れないか。今回は、その準備段階として、教科書のサンプリング方法を検討した。

その検討を通じて、「古典化」という概念がディシプリン生成の様態を把握するために有効なものであるとしても、実際の検証を行うにはかなりの工夫が必要だということが判明した。

われわれは、＜すでに古典群が存在する状況＞のなかで社会学に接触してきた世代である。消え去り忘却された社会学者たちによるいわばもうひとつの社会学ではなく、なぜこの社会学がわれわれの前にあるのか。他でもあり得たのではないか、という感覚は維持したいものであるが、科学論の一部門としてのディシプリン論にどこまで踏み込んでいくのかどうか、悩ましい。

参考文献

Perrucci, Robert. 1980, “SOCIOLOGY AND THE INTRODUCTORY TEXTBOOK,” *American Sociologist* 15(1): 39-49. ほか
備考：本ニュースレター掲載に際し、発表時にレジュメで用いた文言を一部修正した。

デュルケーム社会学の語られ方
——日本の社会学教科書分析を通して——

横山寿世理（聖学院大学）

日本国内の社会学系学部・学科・専攻等がある大学102校において、2015年度開講した社会学科目で教科書として掲載された件数の多い三冊を取り上げて、デュルケームや彼の業績がどのように教育され、受け継がれてきたのかを概略的に報告した。この三冊とは、①長谷川公一・浜田出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』（有斐閣、2007年）、②新睦人『新しい社会学のあゆみ』（有斐閣、2006年）、③那須壽『クロニクル社会学』（有斐閣、1997年）であった。

これら三冊で、デュルケーム社会学に関して共通して言及されているのが、「社会的事実」「正常／病理」「連帯」の概念である。

なかでも、「社会的事実」がデュルケーム社会学の中心的な概念に据えられているのは、いずれの教科書も、「社会的事実」が個人に外在して、個人を拘束する概念として説明していることから明らかである。

その一方で、『社会学』と『クロニクル社会学』では、デュルケームの社会学的視点である「正常／病理」を、ヴェーバーの「価値自由」に基づく立場と結びつけて説明しているということを取り上げた。ヴェーバーの「価値自由」については議論があるところだが、わざわざ「価値自由」の説明にデュルケームの『社会学的方法の規準』の解釈を取り入れていることを指摘した。

さらに、『新しい社会学のあゆみ』では、フーコーの現代社会学的意義は、デュルケームが「連帯」を重視したこととは切り離せない、とされる。これに加えて、『社会学』でも中間集団による「連帯」が社会学的視点であり、現代社会にも通じる普遍的な価値であることが示される。

報告では、三冊の教科書の検討を通じて、次の二つのよう、デュルケーム社会学教育方法があることを示した。一つは、「価値自由」に代わる「正常／病理」概念や、「連帯」概念のように、デュルケーム社会学が、実際の経験的な事象と結びつけられ、具体化されて、教育された可能性である。もう一つは、教科書のなかで扱われる現代の社会学理論を、社会学理論として読者にわかりやすく理解させるため、いわば社会学において権威づけを行うため、デュルケーム社会学に言及するという方法である。今後はこれらの分析をさらに展開させたい。

日本の社会学教科書における理論・学説の教授法

川本彩花（関西大学）

社会学は、19世紀ヨーロッパで誕生した学問だが、今日では、世界各国で（普遍的な）「科学」のひとつとして学ばれ教えられている。しかし、西洋人にとっての社会学と、日本人（非西洋人）にとっての社会学には、なにか大きな違いがあるのではないか。日本人が社会学を学ぶ・教えるときには、西洋との社会のあり方や社会に対する考え方などの違いゆえに、西洋人にはない「障壁」といった側面もあるのではないか。

本報告では、このような問題意識のもと、社会学教育において理論・学説が教えられる際、その理論・学説のもつ地域性や時代性、およびその理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などはいかに扱われているのかについて検討を行った。すなわち、社会学の理論・学説を、その背景と結びつけて学ぶ・教えることは、一種の知識社会学的な作業であると考えられるが、社会学教育において、このような「知識社会学的実践」はいかに行われているのかという問いである。

分析方法としては、当面は日本の社会学のテキストを対象に分析を進めることとした。また、テキストは、理論・学説そのものの解説に加えて、その理論・学説の背景にも目配りしているものを対象とし、複数のテキストを取り上げ比較検討を行った。具体的に今回分析対象としたテキストは、『はじめて学ぶ社会学——思想家たちとの対話』（土井文博・萩原修子・嵯峨一郎編, 2007, ミネルヴァ書房）、および『社会学ベーシックス』（井上俊・伊藤公雄編, 2008～2011, 世界思想社）である。なお、将来的には、国際比較研究へと展開することも視野に入れている。

分析の結果、まず、社会学の理論・学説のもつ地域性や時代性、その理論・学説を主張した人の個人史的背景（パーソナル・ヒストリー）などの扱われ方（語られ方）として、次のような類型を提示した。すなわち、理論・学説が作り出されたとき／受容されたときの状況・背景に言及するもの、および地域性・時代性・個人史的背景などがあることを肯定（強調）／保留／否定するものである。また、上記の2種類のテキストを比較検討した結果として、同一の社会学者（理論・学説）に対する記述・説明の仕方の相違についても具体例を提示しつつ報告を行った。

今回は2種類のテキストの比較検討にとどまっているが、報告後の議論等においていただいたご指摘・ご教示等をもとに、これからさらに精査し検討を進めていきたい。

ドイツの大学教育における社会学史・社会学理論とデュルケーム

——シラバスと教科書から——

梅村麦生（日本学術振興会／京都大学）

本報告では社会学教育におけるデュルケーム／デュルケーム学派に関して、フランスや日本以外の例として、ドイツの大学における社会学専攻の科目から、デュルケームを取り上げている社会学史・社会学理論のシラバスと教科書の一例を紹介した。

ドイツの大学での社会学史・社会学理論の科目としては、「社会学理論」「社会学理論の歴史」「社会学的思考の主要潮流」といった講義が開講されており、デュルケームはそこで古典的な社会学者の代表つまり社会学の「古典家（Klassiker）」のひとりとして、そして社会学を固有の学問分野として確立した学者のひとりとして言及されている。例えば、「社会学的思考の中核となる問いに対する最重要の古典的な理論的・概念的な回答」を提示しているものとして（「古典社会学理論」デュイスブルク＝エッセン大学、社会学コース）、特に「実証主義社会学」や「社会の構造効果」を研究した者として記述されている。

また教科書として用いられているテキストから、フォルカー・クルーゼ『社会学史』（Volker Kruse, 2012, *Geschichte der Soziologie*, 2版, UVK.）とハルトムート・ローザほか『社会学理論』（Hartmut Rosa, David Strecker, und Andrea Kottmann, 2013, *Soziologische Theorien*, 2版, UVK.）を取り上げた。

クルーゼ『社会学史』は社会学史の課題を、「社会学の発展をそのつどの歴史的文脈から理解できるようにすること」や、「社会学の〈古典的〉な知識在庫を伝えること」であるとして、1890-1933年という時期の中で重要な社会学者の筆頭としてデュルケームを挙げている。デュルケームの導入的な紹介として、「社会学特有の認識対象（社会的事実）を指摘」し、「方法的・理論的に画期的な研究を行った」としている。ローザほか『社会学理論』では、社会学理論が扱う近代化の次元として、(1) 順化、(2) 合理化、(3) 分化、(4) 個人化の四つを挙げ、デュルケームは社会学の中で分化を扱った学者の代表として取り上げられている。

以上、少数の事例からではあるが、今日のドイツ語圏の社会学で、デュルケームが社会学の方法論および研究領域を確立させた「古典家」の一人として言及されている様を確認することができた。

日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケーム

白鳥義彦（神戸大学）

理論・学説史という社会学のディシプリンのコアの部分を適切に継承するための一視点を得るために、またディシプリンとしての社会学という枠組みの中で、社会学教育という観点から、デュルケーム社会学のどのような側面が重要視されてきたかということを明らかにするために、日本の教科書12冊、フランスの教科書3冊を取り上げて分析し、以下の諸点を明らかにした。

まず、こうして複数の教科書を検討してみると、生前に刊行されたデュルケームの4冊の著作、中でも初期の3冊はほぼ必ず言及されることがわかる。

社会学の制度化という文脈で、『規準』、特にそこで示された社会的事実への着目がなされ、またアノミーの概念と『自殺論』（および『分業論』）への言及も多く行われている。さらに、連帯への言及も多い印象を受ける。テーマ的には、正常と病理なども多く取り上げられている。

社会学の制度化という観点からは、『社会学年報』の刊行にもいくつかで触れられている。またいくつかの教科書では『社会学講義』にも言及がなされている。一方、経歴としても、また著作としても、教育に関わる比重はデュルケームにおいて大きかったと考えられるが、今回検討の対象とした教科書では思ったほど取り上げられてはいない。これは、教育に関するデュルケームによる議論は、講義録などの形で没後刊行されたということにも拠る部分があろう。また職業集団論も、それ自体としてはあまり取り上げられてはいない印象を受ける。

議論の大きな枠組みとしては、構造論／行為論、方法論的集団主義／方法論的個人主義、といった文脈で、デュルケームとヴェーバーが対比される。この組み合わせに加えて、ジンメルが取り上げられることもある。同時代では、やはりこの3人が最も取り上げられることが多い。

いくつかの教科書においては「デュルケーム学派」にまで論が進められるが、全体として見るとそれほど多くはない。

このように、社会学というディシプリンの中でのデュルケームの重要性をあらためて示すとともに、教科書の中での取り上げられ方には一定の枠組みが見出されることも明らかにすことができた。また、そうした枠組みをもとにして、社会学という学問が形成されているという側面も指摘することが可能である。一方、「ディシプリン」ということを考える際には、教育における「標準化」という点についても留意する必要があろう。例えばアメリカの学部生向けの教科書では、標準化が日本の教科書以上に進んでいる。大学教育の分野別質保証のために「参照基準」が定められるような動向を念頭に置けば、ディシプリンの中でデュルケーム社会学を生かす、ということを考えた場合、枠づけされた「教科書」の中で、どれだけデュルケームの重要性を高めるか、という方向性も考えられる。それは、例えば、研究を通じて新たなデュルケーム像を示す、といったこととは相容れない側面があるかもしれない。

2016 B班（解釈史検討チーム）2016年度第3回班別研究会

日 時：2017年1月7日（土）13:00～17:00

場 所：キャンパスプラザ京都 2階ホール（京都市）

出席者：10名

内 容：金瑛「デュルケーム学派と心理学——デュルケームとアルヴァックスを中心に」

古市太郎「贈与と社会性（le social）——贈与論の継承と展開」

2017 B班（解釈史検討チーム）2017年度第1回班別研究会

日 時：2017年4月15日（土）11:00～12:00

場 所：文京学院大学 本郷キャンパス B館410教室（東京都文京区）

出席者：7名

内 容：「学説史研究は社会学のディシプリン再生にいかに寄与しうるか」というテーマで会議を開催しました。隣接学問との比較によって社会学の固有性を検討する一方、古典の枠組みでは及ばない問題を考察し、近代／現代の落差を見据えた社会学理論の重要性を確認するなかで、活発な討議がなされました。

2017 2017年度第1回全体会議

日 時：2017年4月16日（日）10:15～13:40

場 所：文京学院大学 本郷キャンパス B館410教室（東京都文京区）

出席者：16名

内 容：国際シンポジウムなどについて協議し、各班から、2016年度の活動内容、これまで二箇年度の研究を通して見えてきた具体的な知見と課題についての報告が行われました。

2017 2017年度第1回編集会議

日 時：2017年4月16日（日）14:10～16:10

場 所：文京学院大学 本郷キャンパス B館410教室（東京都文京区）

出席者：15名

内 容：『デュルケーム命題集』（仮題）の構成について検討しました。

2017 B班（解釈史検討チーム）2017年度第2回班別研究会

日 時：2017年6月10日（土）14:00～17:30

場 所：奈良女子大学文学系N棟339室（奈良市）

出席者：8名

内 容：笠木丈「非人格的／人格的な力の熱狂——ベルクソン『二源泉』とデュルケム『原初形態』の比較考察」

江頭大蔵「個人と社会の相互浸透性と異質性」

2017 D班（社会学教育チーム）2017年度第1回班別研究会

日 時：2017年6月16日（金）14:00～18:00

場 所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科C棟2階プレゼンテーションルーム（神戸市）

出席者：5名

内 容： 横山寿世理「デュルケム社会学の教えられ方—日本の社会学教科書分析から」

川本彩花「日本の社会学教科書における理論・学説の教授法」

梅村麦生「ドイツ社会学教科書におけるデュルケム」

白鳥義彦「『社会学教科書の社会学』への視点」

小川伸彦「〈古典化〉論と社会学教科書—論点の整理」

連載 玩味玩読デュルケームのことば 第5回

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。今号のように、デュルケームをめぐる言葉も取り上げることがあります。

周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※ 訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合があります。

●ことばんごう no.12●

最も高い徳は、良き社会秩序に最も直接に必要とされる諸行為を規則正しく厳格に遂行することの中にはない。最も高い徳は、自由で自発的な活動、まったく必要とされない献身、時には賢い管理のための教えに反することさえある献身から作り上げられる。こうした熱狂（狂気）的な徳というものがあるのだ。そしてその熱狂（狂気）こそが徳を偉大なものにしているのである。

<< Les vertus les plus hautes ne consistent pas dans l'accomplissement régulier et strict des actes le plus immédiatement nécessaires au bon ordre social ; mais elles sont faites de mouvements libres et spontanés, de sacrifices que rien ne nécessite et qui même sont parfois contraires aux préceptes d'une sage économie. Il y a des vertus qui sont des folies, et c'est leur folie qui fait leur grandeur. >>

【ミニ解説】

文中「賢い管理」と訳したのは「une sage économie」であるが、économieは《過不足のない》合理的な行為を要請する。デュルケームは当初、規制された社会的分業の実現を主張し、他方でエコノミーを批判し、合理主義者を標榜した（『社会学的方法の規準』）が、『宗教生活の原初形態』を中心とする後期になると非合理的な「集合的沸騰」に社会の本質を見いだすようになる。「集合的沸騰」にみられる《過剰性》こそが、日常の過不足のない社会生活（合理的な économie）を可能にし、さらには日常を超えた創造的な社会変革を主導すると主張する。人間の卓越性（アレーテ）を示す「徳」とはまさにこうした過剰性、必要を超えた献身（sacrifice）・熱狂・狂気（folie）を本質としている、というのがデュルケームのたどり着いたひとつの到達点であった。

（梅澤精 記）

【キーワード】

徳、エコノミー、過剰性、献身、熱狂、集合的沸騰

【出典】“Jugements de valeur et jugements de réalité”, dans *Revue de métaphysique et de morale* 19,

1911, pp.437-453 et dans *Sociologie et philosophie*, 1951 (Presses Universitaires de France 版 p.108)

（邦訳）「価値判断と現実判断」『社会学と哲学』創元社、山田吉彦訳、1946年所収、193頁

●ことばんごう no.13 ●タルドのことば

社会的事物にかんしては、われわれは例外的な特権によって、事実をつくりだした真の原因である個人的行為を手にすることができる。そのような原因は、社会以外の領域における事物には、まったく見あたらぬものである。物理学者や博物学者は、力やエネルギー、存在条件、あるいは他の苦しまぎれの用語をもって事物の原因とみなさざるをえないが、それは彼らが事物の本性をよく理解していないためである。しかし、われわれは社会における諸現象を説明するために、そのようないわゆる「一般的原因」に頼らなくてもよいように思う。

<< En matière sociale, on a sous la main, par un privilège exceptionnel, les causes véritables, les actes individuels dont les faits sont faits, ce qui est absolument soustrait à nos regards en toute autre matière. On est donc dispensé, ce semble, d'avoir recours pour l'explication des phénomènes de la société à ces causes, dites générales, que les physiciens et les naturalistes sont bien obligés de créer sous le nom de forces, d'énergies, de conditions d'existence et autres palliatifs verbaux de leur ignorance du fond clair des choses. >>

るこの議論は、デュルケムとタルドの立場の違いを考えるうえで興味深い。

(池田祥英 記)

【キーワード】 個人的行為、社会的事実、モナド

【出典】 Gabriel Tarde, *Les lois de l'imitation : Etude sociologique*, 2^e éd., 1895 (Félix Alcan 版 pp.1-2).

(邦訳) 『模倣の法則』 河出書房新社、池田祥英・村澤真保呂訳、2007年、28-9頁

【ミニ解説】

『模倣の法則』(1890年、第2版1895年)の冒頭部分であり、そこでタルドは物理学や生物学などと比較した社会学の例外的な特性を主張している。物理学や生物学においては、われわれは原子や細胞の立場に立つことができず、それを外から観察して推測することしかできない。それに対して社会学においては、社会を認識しようとする社会学者もひとりの個人であり、社会の構成要素となっている個人を内側から把握することができる。構成要素としての個人という立場で内側から社会をみるかぎり、何らかの個人を超える意識体が比喩的な意味ではなく、現実として出現するのを目にすることはない。したがって、社会はそれを構成している個人間の関係からうまく説明することができる、というのがタルドの発想である。このような見解は、1895年に発表された彼のモナド論のなかに色濃く表れており(「モナド論と社会学」河出書房新社、村澤真保呂・信友建志訳、2008年)、1894年に開催された第1回国際社会学協会大会でのタルドの報告「要素的社会学」(『国際社会学協会年誌』第1巻、1895年)においては、デュルケムの『社会学的方法の規準』の原型となった同名の論文(1894年に『哲学評論』誌に掲載)に対する批判という形で登場する。

これに対して、デュルケムは『自殺論』の第3編第1章「自殺の社会的要素」でタルドの主張を引用しながら反論している(『自殺論』中公文庫、宮島喬訳、1985年、385-404頁)。『自殺論』におけるタルド批判としては、第1編第4章「模倣」が有名であるが、『規準』のテーマであった社会的事実をめぐる論争のいわば「延長戦」ともいえ

●ことばんごう no.14●

およそ物とは、知性にとってごく自然には洞察しえないようないっさいの認識の対象であり、たんなる精神的な分析方法によつては適切にその概念を構成し得ないようないっさいのもの、さらには、精神がみずからの中から脱して、観察と実験を通じて、もっとも外面向で接近しやすい特質からもっとも感知しがたい根底にある特質へと徐々にすすんでいくという条件においてしか理解されるにいたらないいっさいのものである。

« Est chose tout objet de connaissance qui n'est pas naturellement compénérable à l'intelligence, tout ce dont nous ne pouvons nous faire une notion adéquate par un simple procédé d'analyse mentale, tout ce que l'esprit ne peut arriver à comprendre qu'à condition de sortir de lui-même, par voie d'observations et d'expérimentations, en passant progressivement des caractères les plus extérieurs et les plus immédiatement accessibles aux moins visibles et aux plus profonds. »

【ミニ解説】

アルヴァックスが「デュルケームの学説」(1918年)において取り上げているデュルケームの「ことば」である。言うまでもなく、「社会的事実を物のように考察すること」というデュルケームの命題に関して、「物とは何か」を説明したこの一文に、アルヴァックスは注目して引用しつつ、デュルケームが促した社会学者の科学的な立場を強調する。それは、「社会的事実」を認識する際に、社会学者が先入観を捨て、未知なる世界に入り込むという自覚である。この「デュルケームの学説」において、アルヴァックスはデュルケームの主著をそれぞれ検討している。デュルケームから大きな影響を受けたアルヴァックスであるが、『集合的記憶』におけるデュルケームへの直接的な言及が少ないことを考えると、「デュルケームの学説」は対照的な論考であり、種々あるデュルケームの命題を真正面から取り上げていることになる。

(横山寿世理 記)

【キーワード】

社会的事実（ことばんごう no.1 も参照のこと）

【出典】 *Les règles de la méthode sociologique*, [1937] 1999 (Quadrige/ Presses Universitaires de France 版 p.XII-XIII)

(邦訳)『社会学的方法の規準』岩波書店、宮島喬訳、1978年、24頁

2016年度成果報告（その全部または一部が本科研費補助金の成果であるもの）

●論文・図書

- * 岡崎宏樹、2016、「文学からの社会学——作田啓一の理論と方法」亀山佳明編『記憶とリアルのゆくえ——文学社会学の試み』新曜社、169-196
- * 岡崎宏樹、2016、「規律訓練と主体化（M. フーコー）」西村大志・松浦雄介編『映画は社会学する』法律文化社、161-172
- * 岡崎宏樹、2016、「〈リアル〉の社会学——作田啓一の生成の思想」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂、258-310
- * 小川 伸彦、2017、「ディシプリン／教科書関係論のために——社会学入門テキスト分析における対象書目抽出方法論」『奈良女子大学社会学教育研究論集』1: 17-28
- * 白鳥義彦、2017、「テクストから見るデュルケーム受容」『紀要』（神戸大学文学部）44: 89-107
- * 中倉智徳、2017、「イノベーションと都市——特区政策とクリエイティブ都市論に関する批判的検討」『立命館言語文化研究』28(4): 121-130
- * 三上剛史、2017、「『贈与論』の問題圈と“贈与”の神話——Mauss から MAUSS へ」『追手門学院大学社会学部紀要』11: 1-16

●国内学会

- * 太田健児「社会思想から“社会学”へ——実証主義の系譜の再編の試み」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第2回全体研究会シンポジウム、2016.4.16 於文京学院大学）
- * 岡崎宏樹「現代社会の変容と超近代へのまなざし——作田啓一の犯罪論と憐憫論」（日本社会学理論学会大会 特別セッション「作田啓一の社会学」、2016.9.4 於神戸学院大学）
- * 小関彩子「デュルケム認識論における二つの位相」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第2回全体研究会シンポジウム、2016.4.16 於文京学院大学）
- * 笠木丈「ガブリエル・タルドにおける信念と欲望——メーヌ・ド・ビランの解釈を手掛かりとして」（日仏哲学会 2016年秋期研究大会、2016.9.10 於学習院大学）
- * 北垣徹「ジャン=マリー・ギュイヨーの道徳論」（科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第2回全体研究会シンポジウム、2016.4.16 於文京学院大学）
- * 白鳥義彦「学問の制度化と大学におけるデュルケームの講座」（第68回日本教育社会学会、2016.9.17 於名古屋大学）
- * 白鳥義彦「テクストから見るデュルケーム受容」（第89回日本社会学会、2016.10.8 於九州大学）

2016 年度成果報告

- * 杉谷武信「デュルケムの『道徳の科学』についての試論——『内在的事実』と『外在的事実』の関係を中心に」(2016 年度日仏社会学会大会、2016.11.19 於関西大学)
- * 林大造・中倉智徳「韓国調査について」(科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第3回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について——スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22 於奈良女子大学)
- * 速水(小島)奈名子「台湾調査について」(科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第3回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について——スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22 於奈良女子大学)
- * 藤吉圭二「日程・概要など」(科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第3回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について——スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22 於奈良女子大学)
- * 村田賀依子「ハビトゥスと潜在性 (potentialité) ——実践と状況の関係をめぐる考察」(2016 年度日仏社会学会大会テーマセッション報告、2016.11.19 於関西大学)
- * 吉本惣一・川本彩花「スペイン調査について」(科研費研究「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」第3回全体研究会シンポジウム「海外でのフランス社会学受容について——スペイン、韓国、台湾を事例に」、2016.10.22 於奈良女子大学)

●国際学会

- * Ayako Ozeki, "Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology", 3rd ISA Forum of Sociology, 2016.7.12 University of Vienna
- * Yoshihiko Shiratori, "Morality and Individualism — Suggestion from Durkheim's Theory", 3rd ISA Forum of Sociology, 2016.7.13 University of Vienna

お知らせ・今後の活動

●国際シンポジウム

◆東京開催◆

社会の境界と社会学の境界——社会学のディシプリン再生はいかにして可能か

Limites de la société / Frontières de la sociologie—Quels renouvellements pour la discipline sociologique ?

日 時： 2017年9月18日（月・祝）13:30～18:00

場 所： 日仏会館1階ホール

第一部 司会：白鳥義彦（神戸大学）

13:30 - 13:40 趣旨説明：中島道男（奈良女子大学）

講演者紹介：白鳥義彦（神戸大学）

13:40 - 14:40 講 演

イヴ・デロワ（ボルドー政治学院、エミール・デュルケム研究センター）

La sociologie durkheimienne de la citoyenneté : apports et limites.

市民性をめぐるデュルケム社会学——寄与と限界

14:40 - 15:00 コメント：小川伸彦（奈良女子大学） 古市太郎（文京学院大学）

15:00 - 15:30 イヴ・デロワからのリプライとフロアからの質疑

第二部 司会：北垣徹（西南学院大学）

15:40 - 16:40 報 告

岡崎宏樹（神戸学院大学）

非合理性と流動性——社会学の境界で考える

Irrationalité et liquidité.

荻野昌弘（関西学院大学）

不可視の他者——社会学的伝統の壇外にあるもの

La présence invisible d'autrui : ce qui échappe au cadre classique de la sociologie.

16:40 - 17:00 コメント：イヴ・デロワ

17:00 - 18:00 全体討論

◆京都開催◆

古典から現代へ——社会学のディシプリン再生はいかにして可能か

日 時： 2017年9月21日（木）13:00～18:30

場 所： コンソーシアム京都（キャンパスプラザ京都）2階第一会議室

内 容：

イブ・デロワ

La sociologie durkheimienne et l'histoire : Durkheim peut-il être considéré comme un précurseur de la sociologie historique?

デュルケム社会学と歴史学：デュルケムは歴史社会学の先駆者ととらえられ得るか？

A班 池田 祥英 エスピナス、タルドからデュルケムへ（仮題）

B班 江頭 大蔵 個人と社会の異質性とディシプリンの変容

C班 中倉 智徳 デュルケム受容の国際比較——東アジアを中心として

D班 横山寿世理 デュルケム社会学の受け継がれ方——教科書分析を通じて

お知らせ・今後の活動

◆奈良開催◆

ラウンド・テーブル イヴ・デロワ氏を囲んで

日 時： 2017年9月22日（金）11:00～14:00

場 所： 奈良女子大学文学系N棟339教室（大学正門を入りすぐ右の建物）

クロニクル 2017年1月～2017年7月

- 1月7日（土） 解釈史検討班 2016年度第3回班別研究会（京都市）参加者10名
- 1月12日（木） 部内報第20号配信
- 1月15日（日） ニュースレター第4号発行
- 2月2日（木） 部内報第21号配信
- 3月2日（木） 部内報第22号配信
- 4月13日（木） 部内報第23号配信
- 4月15日（土） 解釈史検討班 2017年度第1回班別研究会（東京都文京区）参加者7名
- 4月15日（土） 第4回全体研究会（東京都文京区） 参加者25名
- 4月16日（日） 2017年度第1回全体会議（東京都文京区） 参加者16名
- 4月16日（日） 2017年度第1回編集会議（東京都文京区） 参加者15名
- 5月11日（木） 部内報第24号配信
- 6月1日（木） 部内報第25号配信
- 6月10日（土） 解釈史検討班 2017年度第2回班別研究会（奈良市）参加者8名
- 6月16日（金） 社会学教育班 2017年度第1回班別研究会（神戸市）参加者5名
- 7月6日（木） 部内報第26号配信

編集後記

「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第5号をお届けします。本科研費研究も3年目を迎え、折り返し地点を過ぎました。今号では、2016年度と今年6月までの研究活動の報告や、2017年度の研究計画を掲載しました。次号では、9月の国際シンポジウムの模様などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第5号

発行日：2017年7月15日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部

中島道男研究室内

E-mail: durkheim2017@gmail.com

HP: <http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/>